

66

## 『内経抜書』における疾病概念： 病因理論と『続医学至要鈔』「寛文配剤」との関連性

吉川 澄美

東京都

味岡三伯一門に関わる『内経抜書』(内閣文庫等写本)ならびに『内経病機撮要弁証』(宝永四年刊)は、医学伝授のありさまを知る上で貴重な資料だと見なせる。2014年学術大会では修辞学的側面から、内経のテキストを江戸時代の生活空間と結びつけた譬喩や対比など和語のレトリックによる学習効率化の工夫が凝らされている事を報告した。ところで湯液治療を主とした流派が内経を基礎教材として使った狙いは何であったのか、改めて考察してみたい。最初の手掛かりとして疾病の捉え方を講義録の内容から探ってみる。

『内経抜書』の構成は①治法、②中焦穀府・附宮衛、下焦精藏、上焦神藏からなる所謂「三藏」、そして③疾病、の3部門から成り立ち、疾病が扱われるのは②と③である。着目すべきは、疾病そのものについて論述する前に「生理学」に相当する所謂「三藏論」によって「平人」の営みを説き、疾病はそこからの逸脱とその蓄積に起因するという大前提に基づくことであろう。平人の常として特に重視するのは中焦における「人は気を穀に受く」(宮衛生会篇)や「五藏六府皆気を胃より稟く」(五味篇)で代表されるような食を通じて全身が養われているという認識であり、機能面でも胃による消穀(師伝篇)は「自然の造化」として説く。ちなみに薬物治療の側面からは「薬も中焦から入りてそれからおよぼさねば上下へ達せぬなり」と説くようにADMEの吸収・分布の概念が認められ、治療判断に大きく関わる故に医者が慎重に察すべき対象として中焦を重視する。下焦の「今日人身生々して止まずは天然自然の道理」(霊蘭秘典論の解説)や上焦の「心の神自ら生ず」(六節藏象論の解説)のように、それぞれ「平人の自然」や自ずから成る有様を説き、その価値に目を向けさせている。

③の疾病部門では傷寒(附風湿)・中寒・中暑・中風・積飲・痰瘧・腸澼・泄瀉・水道・膈咽・水腫・鼓脹・積聚の13門を立て、これらは啓迪集の巻一と巻二で掲げられた病名と大雑把ではあるが内容的に対応できる。大きな相違点は傷寒が最初にあるのと内経での病名を優先する傾向であり、痢病の代わりに腸澼、痰飲の代わりに積飲、脹満の代わりに鼓脹が掲げられる。しかし内容は内経の病名に固執せず、俗名を含めて関連する病名についても触れている。また水道のように病名や病証ではない括り方も掲げている。『溯洄集』を引き、病の病因・病名・病証という3つの側面に触れて、病名や病証ごとに治療方法を細かく羅列する教授様式とは一線を画している。そこには詳細化の方向よりも、疾病概念の統合化によって使い回しの利く知識の再利用を促す姿勢が伺える。疾病についての記述は五行学説に頼らず「三藏」での要点と仲景の理論の融合化によってなされている事も概念の再統合の現れと見なせるかもしれない。とはいえ、13の括りで疾病すべてをカバーできるわけではなく、初学者にとって必要最低限の診断のモジュールを含めるという意図も反映されていると考えられる。

さて、疾病概念の整理統合が『内経抜書』に試みられていると仮定して、それは臨床へどのように生かされたのであろうか。具体的な療治の記録として『続医学至要鈔』(元禄十六年刊)に集録された「寛文配剤」があげられる。123の症例は疾病ごとに分類されてはいないが、婦人や小児も含め多岐に渡る。診断として脈、面色、腹部の脹り、二便、食欲等が記載される。湯液治療として方剤名をそのまま記載した例は比較的少なく、加減を加えあるいは独自に組み立てている。診療記録の中にも内経を引用して治法を説明する箇所があったり、『内経抜書』で使われた病症表現や病名なども散見されるなど、その文面からも同じ流派に属す文書だと推測される。『内経抜書』における基礎理論から「寛文配剤」で見られるような実践的治療へ導く方法論と知識体系化の様相については詳細に検討する余地が残されていよう。